第二工学部の思い出

福　田　武　雄
5代所長・東大名誉教授

福田名誉教授

昭和17年，本郷から第二工学部に転じてから，昭和38年に生研を退官するまでの20年は，大正15年に助教授として工学部に勤務することになってからの自分の東大生活37年の半分以上を占める．この20年は，ただ講義と自分の勉強にだけ没頭しておればよかったそれまでの工学部での平穏な生活にくらべて，大東亜戦争の激化，第二工学部の開学・整備，戦時研究，学徒動労動員，学徒出陣，敗戦，占領軍の進駐，新大学制度の実施，第二工学部の廃止，生研への移行，生研の東京移転，あるいは原田助教授の身分に関する問題など，いろいろの事件や問題がつぎつぎと起こり，これらに対処し，あるいはこれらを解決するために苦心をし努力をした期間である．しかし，今，これをふりかえってみると，自分としては努力のかいがあり，かつ充実した仕事ができた半生であり，苦しかったことも，いやな思いをしたことも，今では，かえってなつかしく思い返されるのである．

昭和17年4月，第二工学部が開学したときには，各学科とも木造2階建の建物が2棟ぐらいづつあるだけで，教官の居室には4本脚の机と椅子のほか何物もなく，書類やカバンなどは机の横の床の上に置いたぐらいである．戦争の激化につれて男子職員はつぎつぎに応召し，事務のみならず研究の職員はほとんど女子で占められるようになった．写真-1は，当時の土木教室の玄関前での写真である．国民服の筆者も，左隣りの井口教授（当時助教授）もともにゲートルを巻き，後に立っているのはもんぺ姿の女子職員である．

戦争中にもかかわらず学生諸君の努力によって「学部開放」が行なわれ，それぞれの学科で苦心をして展示をした．

戦局の悪化につれて，ただ動労動員にだけ出動していた学生諸君も兵士として出陣することになった．写真-2は，昭和19年5月13日，稲毛の一二三旅館において開いた出陣学生送別会での写真である．筆者の左に同じく国民服を着ているのは当時の堀助教授(現在，富士鉄常務)，右隣りはこの写真の4カ月後に亡くなられた原助教授である．井口助教授(当時)の顔も見える．学生服の諸君は，昭和17年入学の第1回土木工学科学生の諸君であり，これらの諸君は，草ぼうぼうとして建物や施設のまったく不十分な開設早々の第二工学部に入学しても，なんらの不平も言わず教官とともに一体となって学部の充実に協力され，入学早々の松林の中の園遊会では佐渡おけさや会津磐梯山を踊り，勉強もし，終戦後はそれぞれの持場において活躍し，もって，今はなき第二工学部の名声を高めることに寄与された諸君である．これらの諸君に引き続いて千葉の学舎に学ばれた諸君も，不平一つ言わずに勉強された．これら学生諸君に感謝するとともに，現今の大学の紛争に照らして感なきを得ない．

昭和17年に開学，昭和29年3月，工学分校の形を最後に消え去った東京(帝国)大学第二工学部の思い出の一端をつづり，本稿を終る．

写真-1（昭和20.4.3）

写真-2　出陣学生壮行会（昭和19.5.13）